

「食道疾患図譜」

〔編集〕 中山 恒明 東京女子医科大学教授

国立栃木病院長・慶応義塾大学客員教授

赤 倉 一 郎

食道外科の歴史は比較的浅いが、食道癌の臨床成功例は Torek(1913)の報告が最初の第1例として認められている。

わが国においては第33回日本外科学会(1932)において「食道外科」の宿題報告を行った瀬尾貞信教授(千葉大)と大沢達助教授(京大)の両氏により食道外科の道が開かれたが、その後に続く進展はほとんど見られなかった。

その後、麻酔、輸血輸液の進歩に伴い胸部外科が発展し、わが国においても、中山恒明教授が瀬尾教授以来の教室の伝統を継いで食道癌に主力を注ぎ、目ざましい進歩をもたらした。内外の注目を集めたことは周知の事実である。われわれも中山恒明教授、故 桂重次教授(東北大)の驥尾に付して食道外科の進歩発展に努力してきたが、最近になって食道外科がようやく全国的に普及進展を示しつつあることは同好の士ともに喜びに耐えないところである。

今回、中山恒明教授編集の「食道疾患図譜」の書評を医学書院より依頼され、喜んで一読したが、まさに時機を得た出版であるとの感を深くした。食道外科を志す人々、気管食道科診療にたずさわる人々にとってまず重要なことは食道疾患の診断と検査方法に習熟することであるが、そのための参考書として本書はまさに適切である。

食道のX線検査法は未知の人々には単純なものに思われがちであるが、実際に微細な所見を捉えるためには透視、撮影、読影において工夫研究しなければならない点が少ない。本書においては豊富な症例から選ばれた優れた図示と実際に経験し工夫を重ねている執筆者らの親切な忌憚ない解説が加えられているから、大いに理解しやすい。

内視鏡検査法は食道疾患の診断に今日欠くことのできない検査法であるが、まずその歴史から始まり、現状の食道ファイバースコープ、食道カ

メラ、硬性直達鏡、直視下生検などにいたる記述は、きわめて親切丁寧で、実際にその場において教えられるような感じである。図も選ばれたものとして読者をうなずかせるものが揃っていて、みごとである。

その後に続く症例編では代表的な食道疾患についてX線写真、内視鏡写真、シェーマ、病理標本写真がそれぞれ対比できるように示され、さらに懇切な解説が加わるので、読者に深い理解と親しみを与える。

これだけのものを1巻の図譜としてまとめることは大変な仕事であると思えるが、今日目ざましく進展しつつある食道疾患に対する臨床の進歩と普及に本書が貢献することは計り知れないものがある。座右に備えべき価値あるものとして広く推奨したい。

A4 頁166 図98 写真280
原色図124 ¥13,000 千300
医学書院刊